

## 「メダカの卵を配布する(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

この3日間、休み時間のたびにメダカの卵を配り続けていた。特に木曜は、理科の授業が6時間連続で、おまけに日直まで重なって、8時間、トイレに行く時間もなかった。



メダカの卵は、私が担任をしている5年の教室のデスクで配った。私のデスクには、顕微鏡は常備、ピーカー、ピンセット、ルーペも常備、水槽も常備、イチヨウの鉢植えも常備・・・ほとんど理科室に近い状態だ。私のデスクの周囲は、余剰の児童机が5個に取り囲まれている。学習の相談や係りの仕事に使われるほか、給食の時には1つのファミリー(班)がここで食事をする。子どもたちはこの席を「食堂車」と呼んで、楽しみにしてくれている。



ほとんどの子どもはLG21の容器を持参していたが、中には小さな化粧品の容器やジャムの空き瓶を持ってきている子どももいた。



こうして各自の容器に、スポイトで卵を2個ずつ入れてあげる。卵は水よりもほんの少し重いので、容器の中をゆっくり沈んでいく。もらった子どもは、その様子を「固唾をのんで」見守っていた。



「ちゃんと、卵2個入ってるかな～? 逃げてないかな～?」と心配そうに底から観察する女兒。密閉された容器から、卵が逃げるわけではないのだが、気持ちはよくわかる。「私の大切な卵」なのだ。



「目が見えてたから、孵化が近いぞ!」と真剣に見続ける男児。LG21は容器の形状から、水を入れると中のものが少し拡大されて見えるのも便利だ。実際にその日のうちに孵化した卵もあった。